



## 「牧野 富太郎先生の事」

小山 鐵夫

最近、NHKの朝ドラ「らんまん」が、その主役に、明治から昭和にかけて活躍された植物学者の大建物、牧野富太郎博士を担ぎ出した事から、牧野先生のお名前があちこちで囁かれる様になった。先生は文久二年に、高知に近い佐川町の大きな作り酒屋の惣領として誕生されたが、3~4歳の時に両親を失われ、祖母に育てられた。家業には興味有られず孤独で、庭の植物に何となく惹かれ、そのうちに裏山の植物とか近所の横倉山の植物にも手を伸ばして、横倉山では新種の木を発見、ヨコグラノ木と命名している。先生は若い頃の自叙伝に当たる細かい文を、戦前~戦後に亘り、「植物記」、「続植物記」、「牧野植物随筆」等の単行本に詳しく、ご自身で書かれているので、その頃の様子はよく分かる。先生の植物好きは普通では無い。事植物に関しては愛情がらみ、80歳を迎えられた時、草木と恋して八十年、だが花との恋は冷めそうに無い、と仰り、大好きな草の一つのニリンソウを抱えてキスされ、「名づけ親が来たぞえ」と囁かれた。私にはどうも心理学的には所謂 pet 愛と合い通ずる処も無きにしも有らずカナ?とも思わせた。観察研究は、super-perfectionist (もしこんな英単語が有るなら)の先生も植物を離れば「らんまん」に成られるのかも知れない。

その頃の先生を良く表現した「山峡の春」と題した上村登氏の「脚本」が昭和23年5月1日の「月刊高知(高知新聞)」に出ている。これをNHKの「らんまん」絡みで、実際に上演出来ないだろうか?観衆は教育面、学者の執念等の面で感銘を受けると信ずる。

曰く板垣退助、曰く濱口雄幸、曰く吉田茂、曰く岩崎弥太郎、等々、高知偉人が数多く、東京に出て、日本 leader 格を務めて来た。これらの高知偉人達は、私の言う kochism(高知主義)、tosaism を背負って、偉業を成し遂げられたと信ずる。これは一体何か?私は退任後の10年高知に赴任し、kochismに良く接して来た。高知の方々は大体明るく open, フと良い事、面白い事にぶつかる、直ぐそれに夢中になって馴染んでしまい、実行に移す。他の事はあまり其の時点では考えない。ここが考えが成功をもたらす所以の一つだと思う。

牧野先生を上記の高知偉人の中の科学者に位置づけたい。

上京された牧野先生は先ず、東大の門を叩かれた。その頃の東大は、アメリカ留学帰りの初代植物学教授の矢田部先生を中心に、植物分類学の欧化に熱心で、「土佐から植物好きで植物名も良く知っている人が来た。」と言って歓迎した。元々徳川時代から、明治時代にかけての日本の植物学は漢方式の薬草研究が主で、大きく分けて、「漢方」、「和方」(中国に有り、日本に無い薬草は日

本の対応種を使う)。それに「蘭方」は欧州人により、長崎へ紹介された外国植物、例えばキバナノレンリソウとかトウヤク(当薬)リンドウ等。よって其れ迄は、日本の植物の名前は欧米の学者によって付けられており、日本から標本同定に外国へ標本を送っていた。例えば、ロシアの Maximowicz が東亜植物の権威なので、矢田部先生は、牧野先生を Maximowicz に紹介して、牧野先生の標本は Leningrad に沢山ある。

牧野先生は飽き足らず、小学校中退、英語も無論 self-taught, Maximowicz に標本を送りながら、文通で、植物の形態の見方、特に比較の仕方から名前の同定の仕方まで Maximowicz から学ばれてしまった。此処に至って、日本の植物は、日本の植物学者で同定、分類ができる事になり、その旨古い学会誌に声明が出ている。私の様に、一生アメリカに勤め(CUNY 教授と日本国外務省国連代表部代表顧問を併任)、明治の日本に思いを致すとこんな声明は噴飯物だが、一見日本の意気込みもよく解り、其れを引っ張った牧野先生の強い意思表示(kochism)も分かり、日本へ nostalgic にもなった。

牧野先生が独学で勉強され、権威になられた、植物学の分野は、基礎も基礎、植物の形能、地理分布、生態形等から、名前を突き止めて細かい記録を取る、と言う、分類学で有る。記録は記載文と微細に及ぶ写生図の双方から取る。牧野先生の記載文は微に入り細を穿つ点で、世界一で有り、植物の写生図は当に神業で有る。

かかる才能をお持ちの先生の目的は、日本の植物誌(Flora)の解明であった。即ち、日本列島に元々生えていた草木と、諸外国と交流後入って来て、日本本来の植物と混じり合った「帰化植物」と呼ばれるもの、さらに、農業振興の為に導入した作物の全てを記載、図解した、Illustrated Flora of Japan を編まれる事であった。元々植物の記載と図は、先生の最初の出版物である「日本植物誌図編」や東大から出版された、「大日本植物誌」の quality を考慮されており乍らも、日本が段々と戦争 mood になって来て、先生の目的は実現不可能と看做され、著作の speed up も意識され、私のような若輩にまで、補強図を委嘱されるなどして、遂に、1940(昭和 15)年に皇期 2600 年記念出版の「牧野日本植物図鑑」出版を見ました。この図鑑のお陰で、日本で見る植物の同定(名前を知る事)が非常に楽で簡単になりました。

日本大学は書物の価値、必要性を良く理解し、大学の 16 学部全部に図書館が有ります。今回図らずも、それら 16 の各学部図書分館から、牧野先生の歴史的図書全部が出てきました。こういう歴史的図書が日大の図書分館に無傷で全部保存されて居たのは、単なる偶然とは考え難く、しかも、それらが見つかったのも、丁度、牧野先生の朝ドラ「らんまん」on air 中とあっては、何かのご縁としか思へません。今後益々、日大図書館の価値を見出し、その発展に勤めましょう。

筆者元職:日本大学生物資源科学部教授・資料館長、NY 市大大学院教授、日本外務省国連代表部代表顧問、高知県立牧野植物園名誉園長、他。